

第21回みつなかオペラ「ランメルモールのルチア」公演評

【音楽の友 11月号コンサート・レビュー】

みつなかオペラ《ランメルモールのルチア》

制約の多い市民オペラで注目し得る成果を収めてきた兵庫県川西市のみつなかオペラ。今年の出し物は難曲《ルチア》。まず評価すべきは全体の音楽的基盤を堅固に、効果的にまとめあげた牧村邦彦の指揮とザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団の演奏。オペラの阿吽の呼吸を知り抜いた彼らの自在感あふれる演奏は、公演全体を豊かに盛り上げる。これがあれば歌手も本来の力を万全に発揮できる。いずれのキャストも好演だったが、特にルチア役の坂口裕子は「狂乱の場」を始め、この難役を終始、説得力豊かに歌いあげた。今少し声に伸びと膨らみが欲しいところもあるが。対するエドガルド役の松本薫平は最高の出来とはいえないまでもその実力はさすが。他ではライモンダ役の片桐直樹が抜きだた存在感。井原広樹の演出も簡潔さの中に見せ場を効果的に作る、実に手慣れたもの。今年もまた出色の成果をあげた公演だった。(9月23日・川西市みつなかホール)

〈中村孝義〉

【Classic Note 11月号 オペラ評】

Classic Note

2012(平成24)年11月1日

< 6 >

ドニゼッティ・シリーズ集大成 圧巻の「狂乱の場」

第21回みつなかオペラ 「ランメルモールのルチア」

オペラ評

兵庫県の川西市が推進している「みつなかオペラ」の第21回は、歌劇「ランメルモールのルチア」(ドニゼッティ作曲)を上演した。(9月22、23日両日、みつなかホール)

「ドニゼッティ・シリーズ」と名付けられた最終回。ドニゼッティは、イタリア・オペラの、まさに原点といってもよく、さして大きいとはいえないホールスケールにも合ったこの企画は、ホールにふさわしいシリーズといえる。ダブルキャストの初日を見た。



撮影：仲野達也

であり、指揮者の牧村邦彦と、初期から演出で参加している井原広樹のふたりの力が大きい。このオペラでデビューした歌手が、一躍、全国へ、世界へ羽ばたいた例は少なくない。今回、そのひとりになりそうなのが、古瀬まきを(ルチア)だ。

古瀬は、清純な美声の持主で、ピッチもいい。そして情感の込め方にも不足はない。圧巻だったのは、有名な「狂乱の場」でのクライマックス。オーケストラのフルートとデュエットのシーンだ。客席で、思わず涙ぐむ姿もみられた。

恋人役エドガルドの清原邦仁も、強い美声のテノールだが、やや力で押しまくる歌唱で、もう少しソットヴォーチェ(柔い声)が使えれば、うまいとはない。そのほか、エ

ンリーコ(松澤政也)、アルトゥーロ(越野保宏)、ライモンダ(鈴木健司)らも好演。

演出の井原は、毎回、本場イタリアの歌劇場ほどの舞台を作って楽しませてくれる。とりわけ装置を担当するマストロマッティ(伊)が、舞台正面に大きな鏡を使用するなど、意表をついたシーンを見せてくれて楽し

来年からは、ベッリーニによる「ベルカント・オペラ・シリーズ」を始めるといふ。これも楽しみだ。(9月22日、みつなかホール)

(日下部吉彦)